

## 奄美大島海峡（瀬戸内町）軍事関係史

防衛研究所 斎藤達志

南西諸島は、古来、大陸及び南洋方面との交通路であり、文化交流などの伝播路であった。また、南西諸島の島々は、大洋を往来する船の寄港所であり、避難所であり、薪炭食料の補給地でもあった<sup>i</sup>。特に大島海峡は、幅約2km、延長約20kmの海峡であり、波が静かで水深も50～70mと深く、岸は湾入の多いリアス海岸であり、大型艦船の泊地となりうる良好な地であった。このため、戦前の大島海峡は、軍事的にみて、その時代に応じて次に三つの役割を担った。すなわち、明治から昭和15年頃までは、東シナ海及び太平洋へ進出する海軍艦隊の前進根拠地として重視されていた。そのために奄美大島要塞が作られた。この中には、今回、国指定遺跡となった西古見砲台、安脚場砲台、手安弾薬本庫が含まれている。次に、日米開戦前後からは、南西諸島航路の護衛や補給及び南方作戦の中継基地としても使用された<sup>ii</sup>。そして三つ目として、米軍が沖縄に上陸する1945（昭和20）年4月以降、必然として奄美大島、特に大島海峡は本土防衛の第一線となり、陸海軍あわせてその守備を固めるとともに、特攻のための中継地ともなった。このように大島海峡は、一つの地域で、明治初期から終戦まで、軍事的に一連のストーリー、つまり明治以来における日本の国防の沿革とその一端が戦跡という形で残っている非常に稀な地域であると考える。

## 奄美大島海峡（瀬戸内町）軍事関係概史

年	大島海峡	陸 軍	海 軍
明 治	19年		・4月26日、奄美大島が対馬沖縄を含む第三海軍区に含まれる。
	22年		・7月1日、佐世保鎮守府開庁
	24年		・5月5日、大島久慈村に石炭庫（大島炭庫）新築
	29年	・奄美大島要塞建設案、閣議に上申（予算計上されず。）	
	30年		・10月8日、大島炭庫を大島需品支庫に改称
	33年		・皆通望楼（奄美大島東岸）が明治33年1月21日に起工、8月1日から運用開始
	37年		・曾津高望楼（奄美大島西岸）（起工37.1.22、運用開始37.2.27）、笠利望楼（奄美大島北端）（起工37.8.29、運用開始37.9.19）
	38年		・明治38年10月19日、皆通、笠利、曾津高の各望楼廃止
大 正	6年		・10月22日、連合艦隊は、海軍大臣に報告書「奄美大島ニ関スル研究調査提出ノ件」を提出
	7年	・帝国国防方針「用兵綱領」に、「海軍作戦計画は、全艦隊を奄美大島付近に集中し、小笠原列島を哨戒線として敵主力の進攻方向によって全力を挙げて出撃することを方針とする。」と、奄美大島が注目される。	
	8年	・12月5日、軍事機密第105号「要塞整理要領追加之件」（T8.12.5）において奄美大島要塞設置が決まる。	
	9年	・6月、父島、奄美大島、澎湖島等、等洋上第一線要塞の建設改編に着手	
	10年	・8月10日、築城部奄美大島支部は、等級、一等、鹿児島県大島郡東方村吉仁屋に定められる。	
	11年	・9月26日、築城部奄美大島支部開設	
	12年	・7月、安脚場砲台、8~10月、実久砲台、西古見第一砲台、江仁屋離砲台、11月、皆津崎第一、同第二砲台、12月、西古見第二砲台を起工	
		・2月27日、海軍軍備制限条約締結（ワシントン会議）の結果、奄美大島の要塞整理に属する築城工事が中止（工事中止当時の現状は、軍道、砲座（砲床未完）及び一部の補助建設物等の構築、備砲作業は未実施）	
昭 和	12年	・3月28日、奄美大島要塞司令部は、等級三等（軍令陸乙第二号（T12.3.28）） ・4月1日、奄美大島要塞司令部を開庁 ・4月30日、築城部奄美大島支部廃止	・3月26日、海軍需品支庫を廃し、海軍軍需支部を大島に設置 ・4月1日、佐世保海軍軍需部所属で大島に軍需支部を設置
	2年	・8月6日、天皇陛下、鹿児島県奄美大島へ行幸	
	6年	・築城部支部が設備した仮設物を未填薬弾丸庫、乾燥火薬庫、薬莢庫、監守衛舎、器材庫、砲具庫、観測所、繫船場、貯水所、軍道等の名称を付して防御營造物として構築 ※手安弾薬庫：主に洞窟式三本、西古見第一砲台：観測所、貯水所、繫船場、火薬支庫、薬莢庫を構築	
	8年	・3月、「要塞再整理及び東京湾要塞施設復旧修正計画要領」により奄美大島要塞兵備が一部変更	
	13年		・5月8日、大島軍需支部改め、大島軍需支庫と改称
	15年	・西古見第一砲台（二八粍榴弾砲×4門）及び実久砲台（克式十五粍加農×2門）に備砲 ・12月2日、「奄美大島ニ於ケル陸海軍防衛造営物ノ地帶区域」告示	

参考図1

昭和	16年	南方作戦の中継基地	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月10日、奄美大島要塞に対し、要塞司令部、要塞重砲兵連隊（19年5月15日、重砲兵第6連隊と改称）並びに要塞病院の臨時編成下令</li> <li>11月8日、奄美大島要塞に準戦備が下令、第1日を11月12日と定める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>8月、古仁屋に航空基地、奄美大島（水上基地）が概成</li> </ul>
				<p style="text-align: right;">参考図2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>10月1日、大島根拠地隊（大島防備隊、大島通信隊）編成</li> </ul>
	17年			<ul style="list-style-type: none"> <li>1月15日、大島根拠地隊廃止、麾下兵力は、佐世保防備戦隊に編入</li> </ul>
	19年		<ul style="list-style-type: none"> <li>3月22日、第32軍が大本営直轄として創設</li> <li>4月1日、奄美大島要塞重砲兵連隊、要塞歩兵第28中隊、奄美大島病院は、第32軍の隸下となる。</li> <li>5月19日、独立混成第21連隊（球7156）編成完結、独立混成第21連隊長は、第32軍司令官直轄の奄美守備隊の指揮官として徳之島に位置し、奄美大島の重砲兵第6連隊を指揮</li> <li>7月24日、独立混成第64旅団司令部、独立混成第22連隊編成完結</li> <li>9月1日、重砲兵第6連隊の砲兵1個中隊（火砲6門）を旅団直轄砲兵として徳之島に派遣。</li> <li>10月10日、米艦載機の初空襲</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4月10日、沖縄方面根拠地隊と第4海上護衛隊が新設</li> </ul>
				<ul style="list-style-type: none"> <li>8月9日、沖縄方面根拠地司令部（第4海上護衛隊司令部）は、瀬相在泊の旗艦から小禄の航空基地に移動</li> </ul> <p style="text-align: right;">参考図3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>10月15日、第17震洋隊と第18震洋隊編制、11月20日加計呂麻島、呑之浦に進出</li> <li>12月15日、佐世保海軍航空隊古仁屋派遣隊は、佐世保鎮守府所属の第951海軍航空隊古仁屋派遣隊となる。</li> </ul>
	20年	本土防衛の第一線	<ul style="list-style-type: none"> <li>3月25日、海上挺進第29戦隊（暁第19768部隊）第2梯隊が、古仁屋入港、阿鉄湾にはいる。</li> <li>6月25日、混成第64旅団は、第10方面軍（台湾）隸下から第16方面軍隸下に編入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3月25日、佐世保鎮守府は、沖縄に進出中の魚雷艇の行き先を大島に変更するとともに、甲標的丙型3隻（201号、202号、203号）を大島に進出させ、両者を大島防備隊司令の一時指揮下に入れた。</li> <li>4月15日、北緯37度10分以北、北緯30度10分以南の所在海軍部隊をもって、大島方面隊（司令長官加藤唯男海軍少将）編成、南西諸島防備指揮官（沖縄方面根拠地隊）隸下</li> <li>7月、陸戦隊を編成（准士官以上95名、下士官、兵、その他2757名）</li> </ul> <p style="text-align: right;">参考図4</p>

<sup>i</sup> 高田利貞『運命の島々一あま美と沖縄一』（同朋舎、1958年）38頁。

<sup>ii</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土方面海軍作戦』（朝雲新聞社、1975年）418頁。